

## 地の果てまでー福音の前進

2023年7月2日

使徒の働き 28章11～31節

序：カイサリア～シドン～ミラ～クニドの沖～クレタ島の良い港～フェニクスに向かう～  
出発 乗換 向かい風 パウロの警告 X

嵐に巻き込まれ漂流～陸地・砂浜へ乗り入れを試みる～マルタ島～  
14日余り 船は座礁 全員無事上陸 島民の親切、パウロを神に  
多くの病人を癒す

### I. ローマへの旅の続き

(1)マルタ島で3ヶ月待機 ～ 停泊していたアレクサンドリアの船に乗船  
3月初めに航海再開 船首にディオスクロイ（航海の守護神）の飾り  
ゼウスの好

(2)シチリア島シラクサ港  
3日間滞在

(3)イタリア半島南端レギオン港（滞在1日だけ）

(4)翌日プテオリ港に到着・下船  
兄弟たち（キリスト信者）を見つけ、7日間滞在・交流  
指揮官の厚意・信頼

(5)陸路帝都ローマに向かう  
ローマから出迎えに来た兄弟たちと合流  
at. アピイ・フォルム、トレス・タベルネ  
パウロは神に感謝、勇気づけられる（ついに念願の、神のご計画の成就）  
第三次伝道旅行中、コリントに滞在期間にローマ人への手紙を書き、  
フィベに託した

### II. ローマでのパウロ AD 61 春

(1)自費で家を借りて住む  
囚人ゆえ兵士が監視、軟禁状態で、ある程度自由が許された

(2)ローマでもまずユダヤ人に伝道  
自分は外に出られないので、呼び寄せた

①ユダヤ人のおもだった人たちに

弁明

彼らの

なぜ囚人としてローマに来ることになったか（関心事・誤解を解くため）

□同胞に対しても、ユダヤの慣習に対しても違反していない

□ユダヤ人からの迫害によって身に危険 ⇒ ローマ人へ渡された（囚人  
エルサレムで

□ローマ法では、パウロは無罪 ⇒ 釈放

□ユダヤ人たちの反対

□カエサルに上訴（同胞を訴える目的ではない、ローマ市民として権利行使

□囚人となったのは「イスラエルの望み」＝「イエスはメシア」＝福音の

### 返答

- ユダヤ国から何も知らせがない
- パウロに関する悪い評判も聞いていない
- キリスト教に対する反対があることは承知しているが、パウロの考えを直接聞いて判断する

②日をあらためて訪れたさらに大勢のユダヤ人たちに

証し：神の国、イエス・キリスト

旧約聖書の預言の成就であること、イエスこそメシアであること

時間：朝から晩まで、1日中

結果：信じる者と信じない者に分かれた（対立）

宣言：ユダヤ人の不信仰 ⇒ 異邦人の信仰・従順

預言者イザヤ 6・9～10を引用

ユダヤ人のかたくなな心（悟らない、知ることができない）

「は神から遠ざかった（心は鈍い、耳は遠い、目は閉じている

自分で拒否しているので、立ち返ることも癒されることもない

ユダヤ人に妬みを起こさせ、彼らも主に立ち返らせるのが神の目的

(3)福音の進展

①パウロは2年間、囚人生活の中でも、力強く宣教活動

訪れる人をみな迎えた

いささかも、はばかりことなく

妨げられることなく

神の国を宣べ伝え、イエス・キリストのことを教え続けた

ユダヤ教、ギリシャ・ローマ文化にも精通

神、人間、律法、キリスト、教会、キリスト者の生活、終末

選び＋恵み＋信仰＝救い

②「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土そして地の果てまで」の神の宣教の  
ブループリントはローマまでで終わりではなく、主の再臨まで継続していく

(4)パウロに関する付記

①ローマでの囚人時代に「獄中書簡」を書き送る

エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ピレモンへの手紙

②一旦釈放、イスパニア（スペイン）伝道？

③皇帝ネロの迫害（再度投獄、殉教）

「牧会書簡」＝テモテⅠ、Ⅱ、テトス

テモテⅡは絶筆 AD 67

Ⅲ. 結び

(1)神の遠大で確かなご計画は、神と神とともに働く（by聖霊）しもべ達によって  
成就する（神の時が満ちて）

(2)同じ主を信じる信仰者・聖徒たちの交わり（助け・励まし）の大切さ

(3)神はイスラエル人を見捨てたのではない、彼らの救いは最終的目的である

(4)福音が宣べ伝えられると結果として、不信仰に留まる／信仰に入るに分けられる

(5)天の御国というゴールから、今の自分の信仰者としての思い、ことば、行動を決めることができる（永遠と今）